



国際協力最前線

第154回

「現場の努力と人身取引問題の動向」

ピッサヌローク人身取引被害者保護福祉センター

山本さくら

私はタイ・ピッサヌローク県にあるピッサヌローク人身取引被害者保護福祉センターにて国際協力機構（JICA）青年海外協力隊の青少年活動員として、初期入所者向けに心身の安定を図るプログラムを企画、提案、実施している。

◇配属先施設概要と活動内容

この施設は、全国に8カ所ある人身取引被害者保護福祉施設（男性用4・女性用4）の一つだ。タイ北部17県を管轄し、女性被害者の心身の安定と社会復帰を目指している。入所者は主に12～18歳の未成年であり、タイ人だけではなく、ミャンマー、ラオスなどの近隣諸国出身者も多い。私は、入所者が最初に心身の安定を図る初期入所室に在籍し、担当職員と協力しながら瞑想（めいそう）やヨガといったマインドフルネス、構成的グループエンカウンター（SGE）の手法を用いたレクリエーション、アートセラピー等の活動を行っている。さらに、英語と日本語の授業や、異文化理解を促進するワークショップを実施している。



JICAボランティアによるヨガ指導の様子



初期入所室職員によるアートセラピー実施の様子

◇施設職員の努力と入所者の変化

当施設の職員は職種にかかわらず、定期的に外部団体主催の研修や各種会議に参加し、入所者との関わり方や具体的なカウンセリング手法を学び研鑽（さん）を積んでいる。センター長をはじめ、人身取引問題を取り巻く環境の変化にいち早く対応できるように常にアンテナを張っている印象だ。中でも初期入所室の担当職員は、約2カ月の間、入所者の人数、年齢、国籍、言語、心身の状況に合わせたプログラムを考案しなければならないため、JICA ボランティアや入所者との対話を繰り返し、日ごろから新しいアイデアの収集に努めている。特に、入所者が帰る家庭や故郷の生活環境に合わせて、より持続可能なマインドフルネスの手法や、入手しやすい道具を用いたアートセラピーを取り入れている点が非常に素晴らしいと感じる。

こうした職員らの努力のおかげで、入所者はライフバランスを再構築するために十分な衣食住と時間、正しく幅広い知識、自立をサポートする確かな技術、他者との関わりや自身の過去と感情に向き合うためのさまざまな経験、退所後の電話相談や家庭訪問などのアフターフォローが保障されている。入所者は「持っていないものや失ったものに×をつけるのではなく、持っているものや手にできる可能性に○をつける練習」を繰り返すことで、自己肯定感を高め、本来の笑顔と自信を取り戻している。

◇人身取引問題における課題と期待

現在、タイ国内における被害者保護の取り組みが評価される中で、外国人被害者の増加が大きな問題となっている。被害の拡大を防ぐためには、国同士の連携を強めることはもちろんのこと、1人1人が正しく情報を取捨選択し、想像力を働かせ、他者の権利と自身の行動に責任を持つことが大切だ。保護福祉施設においては、啓発活動や安全対策の強化、予防カウンセリングを取り入れたよりよい教育機会の提供が課題である。そして、入所者が社会復帰を果たし、自身の経験や知識をより多くの人々に広め、新たな人身取引の被害者・加害者・傍観者を生まない予防ネットワークを構築していくことが期待される。

【筆者紹介】

山本さくら（やまもと・さくら） 山形県の高等学校において3年間勤務後、2019年1月よりJICA青年海外協力隊（青少年活動員）としてピッサヌローク人身取引被害者保護福祉センターにて活動。新潟県東蒲原郡阿賀町出身。1991年生まれ。